

オルドス語 英 Ordos, 中 鄂爾多斯土語 (èěrdūsī-tǔyǔ)

中国, 内蒙古自治区のオルドス地区に行なわれるモンゴル系言語の1つで, 内蒙古語を構成する1方言. 書記には, 内蒙古自治区のモンゴル族に共通する縦書きの蒙古文語を用いる.

オルドス(鄂爾多斯)は, 長城の北に位置し, 黄河の大湾曲部に囲まれた地域をさす. 古くは, ^{かん}河南, ^{かどう}河套とよばれたが, 明末に, モンゴルのオルドス部が占拠して以来, この名をえた. 行政区としては, 内蒙古自治区の^イ伊克昭盟がこれにあたる(〈図〉参照).

オルドス語は, 多数のモンゴル系諸言語, 諸方言の中でも, すでに今世紀前半に, 音声的にゆき届いた記述が行なわれ, 豊富な言語資料が記録された数少ない口語方言の1つである. その功績は, ひとえに, ベルギー出身のモスタールト(A. Mostaert)に帰せられる. モスタールトは, 1906年から1925年まで, 南部オルドスのボロ・バルガス(Boro balγasu)にカソ

〈図〉 オルドス地域



リック伝道師として滞在するかたわら、同地の口語の記述と資料の収集に努め、オールドス語の精緻な音論をはじめ、文法と語彙を付した大部の口承テキスト、および、口語辞典の3部作を公刊して、モンゴル口語研究の金字塔をうちたてた。中でも、オールドス語辞典 (*Dictionnaire ordos I-III, Peking, 1941-44*) は、豊富な語彙と用例に加えて、蒙古文語索引、フランス語による意味索引、民族誌・民俗学的索引をも備えた大著で、モンゴル研究者に限りない便宜を提供してきた。

上述のように、オールドス語は、モンゴル系諸言語の中で、チャハル (Chakhar) 方言、ハラチン (Kharchin) 方言、ホルチン (Khorchin) 方言等とともに、内蒙古語の1方言として位置づけられ、この観点からすれば、オールドス「方言」というよび名が適切である。ここでは、モスタールトが記述した口語の体系を「オールドス語」として、その主要な言語的特徴を概観する。それは、モスタールトによるオールドス語の研究がモンゴル語研究史において重要な位置を占めているというだけでなく、そこに記述されているオールドス語自体が、モンゴル系の諸言語中において、かなり特殊な言語的な特徴を有していることによる。

オールドス語は、確かに他の内モンゴル諸方言と多くの主要な言語的特徴を共有しているが、その一方で、それらとは明瞭に区別される、一連の独自の特徴を有することもまた事実である。そして、オールドス語独自の特徴は全体として保守的な傾向が強い、ということに注目し得る。別言すれば、オールドス語には、他の内モンゴル諸方言のみならず、それ以外の諸言語、諸方言でも失われた一連の古風な言語的特徴が保存されており、モンゴル語の歴史・比較研究にとって貴重な証拠を提供している。

モスタールトの記録から半世紀以上の歳月を経た今日、その間の激しい社会的変動や住民の移動、交通、通信、教育の発展により、オールドス語自体も、中国語や他の内モンゴル諸方言との接触による混淆が進んでいると推察される。事実、今世紀後半に公刊されたオールドス方言の記述には、第2音節以降の短母音の弱化等、モスタールトの記述と異なった報告もある (たとえば、B. H. Todaeva, 1960) が、もしそうであるにしても、モスタールトの記述資料は、以前の言語状態の記録として、いっそう貴重である。

[音 声] オールドス語独自の音声的特徴としては、何よりもまず、語の第2音節以降の短母音が比較的よく保たれていることである。第2音節以降の短母音は、チャハル方言等、他の内モンゴル諸方言のみならず、ハルハ・モンゴル語、ブリヤート語、カルムイク語、ダグル語等、語の第1音節に強勢をもつ諸言語、

諸方言において一様に弱化しており、この点で、オールドス語は、モンゴル系諸言語の中でも特殊な位置を占めている。たとえば、次の例では、オールドス語の場合第2音節の短母音の違いだけで意味が区別されている。

オールドス語 チャハル方言 cf. 蒙古文語

| | | |
|----------|----|--------|
| ama 「口」 | am | ama(n) |
| amu 「穀類」 | am | amu(n) |
| ami 「生命」 | æm | ami(n) |
| am 「平安」 | — | — |

一般に、オールドス語は、第2音節以降の短母音に関して、祖語の状態をよく反映しているとみなすことができる。ただし、この言語においても、第1音節の広い円唇母音 *o, *ö に後続する位置では、非円唇母音 *a, *e が上記の円唇母音に同化する変化 (円唇同化) が観察される。

蒙古文語 オールドス語

| | |
|------------|-------|
| qola 「遠い」 | xolo |
| olan 「多くの」 | olon |
| bölek 「群」 | bölök |

次に、オールドス語では、チャハル方言等の第1音節の広い円唇母音 o, ö に対して、一連の語で、それぞれ狭い円唇母音 u, ü が対応している。ポッペ (N. Poppe, 1951) によれば、これは、オールドス語において、元来の第1音節の母音 *o, *ö が、第2音節の狭い円唇母音 *u, *ü に同化した結果である。

蒙古文語 オールドス語 チャハル方言

| | | |
|--------------|-------|-------|
| modu(n) 「木」 | mudu | mod |
| yosu(n) 「慣習」 | jusu | jos |
| öndür 「高い」 | ündür | öndör |
| ödü(n) 「羽毛」 | üdü | öd |

こうして、他方言の第1音節の o, ö に対応してオールドス語に u, ü がある場合、祖語の第2音節に母音 *u, *ü を推定することが可能となる。この場合にも、オールドス語は蒙古祖語における第2音節の母音の推定に重要な証拠を提供している。

このように、内蒙古語を構成している方言が、独自の音変化を介して蒙古祖語と結びつく限り、系統的に内モンゴル諸方言がひとつに収束する中間的な共通段階をたてることは不可能とせねばならない。

このほか、オールドス語に目立った音声的特徴としては、チャハル方言等の母音 i, e, ü, ö の前に現われる口蓋摩擦音 x に対して、閉鎖音 k が対応することをあげることができる。

オールドス語 チャハル方言

| | |
|--------------|------|
| kéle 「舌, 言葉」 | xel |
| kün 「人」 | xüŋ |
| ködö 「草原」 | xödö |

kīd 「僧院」 xīd

また、名詞語幹末の不定の n は、チャハル方言等と同様に、主格形では失われているが、語末の鼻音 n と ŋ の区別は保持されている。

| 蒙古文語 | オルドス語 | チャハル方言 |
|------------|-------|--------|
| üsü(n) 「毛」 | üsü | üs |
| on 「年」 | on | oŋ |
| ang 「狩」 | aŋ | aŋ |

改新的な特徴としては、チャハル方言と同様、語頭の張り子音 (fortis) t, k, tš, x が、第2音節頭の張り子音の前で異化して、緩み子音 (lenis) d, g, dž, G になっていることである。

| 蒙古文語 | オルドス語 | cf. ハルハ・モンゴル語 |
|-------------|-------|---------------|
| takiya 「鷄」 | dakā | tāxjā |
| köke 「青い」 | gökö | xöx |
| času(n) 「雪」 | džasu | tsas |
| qataγu 「固い」 | gatū | xatū |

この変化は、第1音節に長母音、二重母音、子音 m, n, ŋ が含まれるときには妨げられる。

| 蒙古文語 | オルドス語 |
|---------------|----------|
| toγusu(n) 「埃」 | tōsu |
| qayiči(n) 「鉄」 | xätsi |
| qamtu 「一緒に」 | xamtu |
| čengker 「青い」 | tšingker |

〔形態・文法〕 オルドス語の目立った形態的特徴を列挙すれば、次のようである。

1) 名詞複数接尾辞の1つとして、-ūs という形を用いる。

例) dojoŋgūs 「家畜に対するののしり」(dojoŋ 「供物」)

2) 名詞の曲用で、不定の n をもつ名詞は、不定の n を伴った形が属格形となり、n に終わる名詞は接尾辞 -i をとって属格形となる。

不定の n をもつ名詞：

| 主格形 | 属格形 |
|-------------|--------------|
| xada 「岩が」 | xadan 「岩の」 |
| elege 「肝臓が」 | elegen 「肝臓の」 |
| temē 「ラクダが」 | temēn 「ラクダの」 |

子音 n で終わる名詞：

| | |
|------------|-------------|
| xān 「皇帝が」 | xāni 「皇帝の」 |
| oron 「場所が」 | oroni 「場所の」 |

3) 連合格の接尾辞 -lā (-lē, -lō, -lō) を用いる。

例) baḡši 「先生」—baḡšilā 「先生と(一緒に)」

4) 人称代名詞の第1人称複数形 bida 「我々」の斜格形語幹が man- となる。

例) mani 「我々の」
mandu 「我々に」

manig 「我々を」

manās 「我々から」, など。

また、第2人称複数形に ta 「君たち、あなた方」を用いる(単数の尊称「あなた」としても用いられる)。

5) 指示代名詞 ene 「これ」, tere 「あれ、それ」の斜格形語幹は、それぞれ enün-, terün- である。

6) 動詞活用語尾の中で目立つのは、形動詞 -mār (-mēr, -mōr, -mör) と並んで、-ma (-me, -mo, -mō) ~-m が用いられることである。

例) butšalma xalūn usu 「沸いているほど熱い湯」

条件副動詞の1つとして、-ün(-ün)のついた形を用いる。

例) tšige- 「そうする」—tšigün 「そうすれば」
itši- 「行く」—itšün 「行けば」

限界副動詞の接尾辞として、-tar(-ter, -tor, -tör)をもつ。

例) ükü- 「死ぬ」—üküter 「死ぬまで」
tšad- 「満腹する」—džadtar 「満腹するまで」

〔語彙〕 オルドス語に特徴的な若干の語彙と、その用法がある。たとえば、「旧暦の2月」をさす ta-wun sara (字義は「5の月」)、「東」「西」「南」「北」を意味する urdu, xoedu, barün, džün (オイラト語の一部を除く他の大部分の方言では、これらは「南、北、西、東」をさす)、等。

〔参考文献〕

- Mostaert, Antoine, "Le dialecte des Mongols Urdu (sud). Étude phonétique", *Anthropos* XXI (1926), XXII (1927)
- (1937), *Textes oraux ordos, recueillis et publiés avec introduction, notes morphologiques, commentaires et glossaire* (Monumenta Serica, Monograph series No. 1, Catholic University of Peking, Peip'ing)
- (1941-44), *Dictionnaire ordos I-III* (Peking; 2nd edition, 1968, Johnson Reprint, New York-London)
- Street, John C. (1966), "Urdus Phonology: A Restatement", *Ural-Altäische Jahrbücher* 38 (Wiesbaden)
- Poppe, Nicholas (1951), "Remarks on the vocalism of the second syllable in Mongolian", *Harvard Journal of Asiatic Studies* 14 (Cambridge, Mass.)
- (1964), "Das Ordossische", *Handbuch der Orientalistik*, I Abt., V Band, II Abschnitt: *Mongolistik* (E. J. Brill, Leiden-Köln)

Todaeva, B. H. (1960), "Mongolische Dialekte in
China", *Acta Orientalia Hungaricae* X, 2
(Budapest)

[参 照] モンゴル諸語, 内蒙古語

(栗林 均)